

先月までの為替相場のレビューと、
今後の注目の経済指標やイベントを元に、為替相場の展望をお届けします。

2016/09/01

米国が利上げに踏み切るか

通貨ペア	基調		ページ数
ユーロ/円	↑	レンジ上抜けで上伸余地 予想レンジ: 109.200~119.000円	2-3
ユーロ/ドル	↓	米ドルの動きに注意 予想レンジ: 1.08000~1.14500ドル	4-5
ポンド/円	↑	月足チャートは底入れ示唆も 予想レンジ: 131.000~145.000円	6-7
ポンド/ドル	↓	ドルの動きがカギに 予想レンジ: 1.27000~1.35000ドル	8-9

※通貨ペアをクリックすると、そのページにジャンプします



本レポートは、投資判断の参考となる情報の提供を目的としたものであり、投資勧誘を目的として提供するものではありません。投資方針や時期選択等の最終決定はご自身で判断されますようお願いいたします。また、本レポートに記載された意見や予測等は、今後予告なしに変更されることがございます。なお、本レポートにより利用者の皆様に生じたいかなる損害についても、株式会社外為どっとコム総合研究所ならびに株式会社外為どっとコムは一切の責任を負いかねますことをご了承願います。

Copyright©2016 Gaitame.com Research Institute Ltd. All Rights Reserved. www.gaitamesk.com

ユーロ/円 8月の推移

8月のユーロ/円相場は112.317～115.431円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約1.1%の上昇(ユーロ高・円安)となった。

夏季休暇シーズンで市場参加者が減少する中、5日に112.317円の安値を付けた後は半月以上に渡りレンジ(概ね112円台前半～114円ちょうど前後)でもみあいが続いた。しかし、月末にかけて米9月利上げ観測が浮上してドル/円相場でドル買い・円売りが強まった影響などを受け、ユーロ/円はレンジ上限を突破すると、約1か月ぶりに115円台を回復して取引を終えた。



四本値	
OPEN	114.199
HIGH	115.431
LOW	112.317
CLOSE	115.392

2日	麻生財務相が「国債の市中発行額を維持し、40年債増発に理解を求めた」「50年債という発想はない」と発言し、円買いが強まった。NYダウ平均の下落も重石となり、113.010円まで一段安となった。
4日	岩田日銀副総裁が「総括的な検証は物価2%目標の早期達成のために行うもので、量・質を減らすという金融引き締めは考えられない」と発言。これを受けて円売りが優勢となり、113.274円まで上昇した。
12日	ユーロ圏6月鉱工業生産は前月比+0.6%(同:+0.5%)、ユーロ圏4-6月期国内総生産(GDP)・改定は前年比+1.6%(同:+1.6%)と、ほぼ予想通りの結果となった。ユーロ相場の反応は限定的。その後、米国で7月小売売上高や7月生産者物価指数など予想を下回る経済指標が複数発表され、ドル/円相場でドル売り・円買いが強まった。この影響を受けてユーロ/円は112.725円まで下落した。
18日	7月20-21日に開催された欧州中銀(ECB)理事会の議事録が公表され、「現段階で、金融政策上の対応をとる可能性について討議するのは時期尚早という認識が、メンバー間で広く共有された」「下向きリスクが明らかに高まったものの、今後数カ月間に得られる情報を評価する、さらなる時間が必要」などが明らかとなった。
23日	仏8月製造業PMI・速報は48.5(予想:48.8)、独8月製造業PMI・速報は53.6(同:53.6)、ユーロ圏8月製造業PMI・速報は51.8(同:52.0)という結果となった。ただ、ユーロ相場の反応は薄かった。
29日	前週27日に黒田日銀総裁が「必要ならば躊躇なく追加緩和を行う」「量・質・金利のいずれも追加緩和の余地は十分にある」など見解を示すと、早朝から円売りが強まった。その後、日経平均が一時400円超上昇すると、114.687円まで一段高となる場面が見られた。
31日	ユーロ圏8月消費者物価指数・速報は前年比+0.2%と予想(+0.3%)を下回る伸びに留まったが、反応は限定的。ただ、その後はドル/円が上昇するのに連れてユーロ/円は115.431円まで値を上げた。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

EUR/JPY

日経平均

OPEN	16415.31
HIGH	16943.67
LOW	15921.04
CLOSE	16887.40

独 D A X

OPEN	10426.36
HIGH	10802.32
LOW	10092.53
CLOSE	10592.69

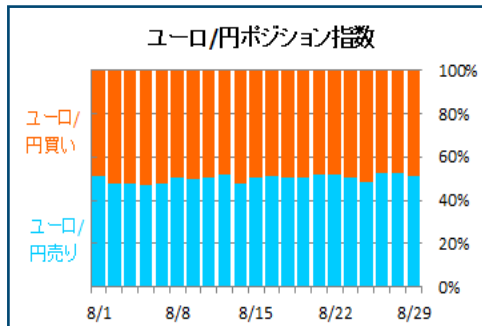
独2年債利回

OPEN	-0.616%
HIGH	-0.589%
LOW	-0.649%
CLOSE	-0.618%

独10年債利回

OPEN	-0.112%
HIGH	-0.019%
LOW	-0.121%
CLOSE	-0.065%

8月のポジション動向



9月のユーロ圏の注目イベント

- ・7月ユーロ圏小売売上高(5日)
- ・4-6月期ユーロ圏GDP・改定値(6日)
- ・ECB理事会(8日)
- ・9月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数(13日)
- ・TLTRO II 2回目(20-21日、結果発表22日)
- ・9月独/ユーロ圏製造業PMI・速報(23日)
- ・9月独Ifo景況感指数(26日)
- ・9月独消費者物価指数・速報値(29日)
- ・9月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(30日)

9月の見通し

[月間指標カレンダー\(外部リンク\)](#)

9月のユーロ/円は、前月末に半月以上続いたレンジ(概ね112円台前半~114円ちょうど前後)を上抜いた流れを引き継いでスタートしており、日足の一目均衡表の雲を上抜けられるか注目したい。今年に入り雲の上抜けは5度失敗するなど強力な上値抵抗となっているが、もし突破できれば上昇トレンドに入る可能性がある。その場合、目先は週足の一目均衡表の基準線(118.709円)が上値目処となるだろう。

材料面では、日銀金融政策決定会合(20-21日)にも注目したい。黒田総裁が「9月にまとめる『総括的な検証』を踏まえ、追加的な緩和措置を講じる可能性は十分にある」と発言するなど、追加緩和に踏み切るとの見方は根強い。会合を前に緩和期待が高まる事があれば、円売りが活発化してユーロ/円相場を押し上げる事も考えられる。各種報道に注意したい。

なお、英国が欧州連合(EU)離脱を決定した後も欧州景気は堅調である事などから、今月のECB理事会での追加緩和観測は後退している。金融政策が現状維持となればユーロ相場に与える影響は限定的と見る。(川畑)

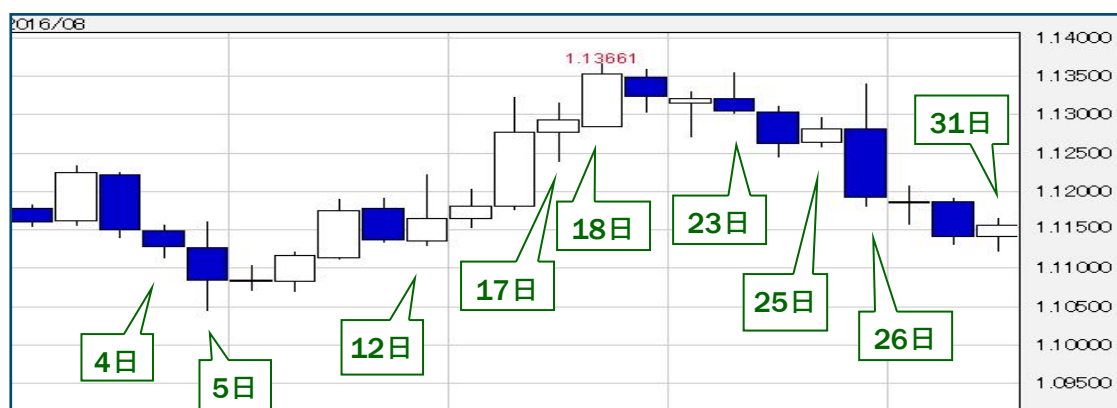
(予想レンジ: 109.200~119.000円)

ユーロ/ドル 8月の推移

EUR/USD

8月のユーロ/ドル相場は1.10456～1.13661ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.2%の小幅下落(ユーロ安・ドル高)となった。

12日の米7月小売売上高を始め弱い米経済指標が複数発表され、米早期利上げ期待が後退すると、ユーロ/ドルは18日に1.13661ドルまで上昇。しかし、26日の米連邦準備制度理事会(FRB)の正副議長の発言をきっかけに9月利上げ期待が再び浮上した事から反落するなど、米国要因に左右される事が多かった。月足チャート上に十字線を付けており、方向感が定まらなかった事が窺える。



四本値

OPEN	1.11790
HIGH	1.13661
LOW	1.10456
CLOSE	1.11561

4日	英中銀(BOE)が市場予想を上回る金融緩和策を発表し、ポンド/ドル相場でポンド売り・ドル買いが強まった。これに連れてユーロ/ドル相場でもドル買い・ユーロ売りが優勢となり、一時1.11139ドルまで下落。ただ、その後はユーロ/ポンド相場でもユーロ買い・ポンド売りが強まると切り返した。
5日	米7月雇用統計が強い結果となった事を受けてドル買いが強まると、ユーロ/ドルは一時1.10456ドルまで下落した。
12日	ユーロ圏6月鉱工業生産は前月比+0.6%(同:+0.5%)、ユーロ圏4-6月期国内総生産(GDP)・改定は前年比+1.6%(同:+1.6%)と、ほぼ予想通りの結果となった。ユーロ相場の反応は限定的であった。
17日	米連邦公開市場委員会(FOMC)議事録が公表され、メンバーの一部が早期の利上げが必要との考えを示していたことが明らかとなった。これを受けてドル買いが強まると、ユーロ/ドルは1.12396ドルまで下落。しかし、参加者は総じて「利上げ前にさらに指標を見極める必要があるとの見解で一致」との見方も明らかとなると、ドル売りが優勢となって1.13156ドルまで反発した。
18日	7月20-21日に開催された欧州中銀(ECB)理事会の議事録が公表され、「現段階で、金融政策上の対応をとる可能性について討議するのは時期尚早という認識が、メンバー間で広く共有された」「下向きリスクが明らかに高まったものの、今後数カ月間に得られる情報を評価する、さらなる時間が必要」などが明らかとなった。
23日	独8月製造業PMI・速報は53.6(同:53.6)、ユーロ圏8月製造業PMI・速報は51.8(同:52.0)という結果となった。ただ、ユーロ相場の反応は薄かった。
25日	独8月Ifo景況指数が106.2と予想(108.5)を下回った。これを受けてユーロが小安くなる場面が見られた。
26日	米連邦準備制度理事会(FRB)のフィッシャー副議長が「8月雇用統計が米FOMCの決定に影響へ」「景気が力強さを増した事は証明済み」「イエレンFRB議長の発言は9月利上げの可能性と整合」などと発言。これを受けて9月利上げが急速に意識され、ドル高が進行すると、ユーロ/ドルは1.11809ドルまで下落した。
31日	ユーロ圏8月消費者物価指数・速報は前年比+0.2%と予想(+0.3%)を下回る伸びに留まったが、反応は限定的であった。

EUR/USD

NYダウ平均

OPEN	18434.50
HIGH	18668.44
LOW	18247.79
CLOSE	18400.88

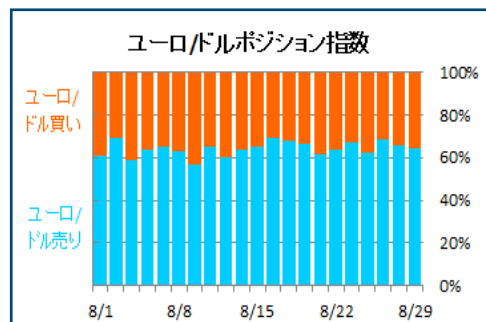
独10年債利回

OPEN	-0.112%
HIGH	-0.019%
LOW	-0.121%
CLOSE	-0.065%

米10年債利回

OPEN	1.4616%
HIGH	1.6330%
LOW	1.4599%
CLOSE	1.5800%

8月のポジション動向



9月のユーロ圏の注目イベント

- ・7月ユーロ圏小売売上高(5日)
- ・4-6月期ユーロ圏GDP・改定値(6日)
- ・ECB理事会(8日)
- ・9月独/ユーロ圏ZEW景気期待指数(13日)
- ・TLTRO II 2回目(20-21日、結果発表22日)
- ・9月独/ユーロ圏製造業PMI・速報(23日)
- ・9月独ifo景況感指数(26日)
- ・9月独消費者物価指数・速報値(29日)
- ・9月ユーロ圏消費者物価指数・速報値(30日)

9月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

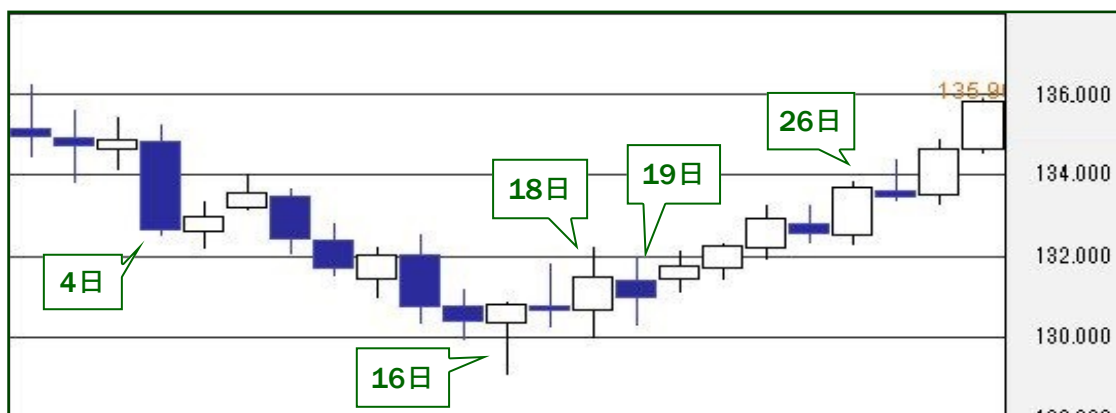
9月は米国で金融政策の発表が予定されている。8月以降複数の米金融当局者が早期利上げを示唆した事で、米9月利上げ期待が浮上している。9月米FOMC(20-21日)での利上げの可能性を見極める上で、2日の米8月雇用統計に市場の関心が集まりそうだ。賃金や労働参加率など質を含めて好調な雇用状況が明らかとなれば、ドル買いが強まってユーロ/ドル相場に下落圧力が掛かる公算が大きい。米FOMC前に発表される米8月小売売上高(15日)や米8月消費者物価指数(16日)にも、注目したい。

今月のECB理事会について、追加緩和期待が後退している。前回7月の理事会で「英EU離脱決定による影響を見極めるのは時期尚早」としたため一部で緩和が期待されるも、その後発表された欧州の景気指標が堅調であった事が、その理由に挙げられる。同時に発表されるECBスタッフ予想の景気・物価見通しが6月時点(GDP伸び率:16年1.6%、17年1.7%、18年:1.7%。インフレ見通し:16年0.2%、17年1.3%、18年1.6%)と比べ変更されるかにも、注目したい。(川畑)

(予想レンジ:1.08000~1.14500ドル)

ポンド/円 8月の推移

8月のポンド/円相場は129.127~136.263円のレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.6%の上昇(ポンド高・円安)となった。4日に英中銀(BOE)が、利下げと量的緩和の拡大を同時に行う包括的刺激策を発表した上に追加緩和にも前向きな姿勢を示すと、中旬にかけて129.10円台まで下落した。しかし、それ以降は7月分の経済指標に予想を上回る結果が相次いだことからポンドを買い戻す動きが強まった。同国が6月に欧州連合(EU)離脱を決めた影響が特段見られなかった事で、追加緩和観測が後退した格好だ。月末が近付くと円ロングの巻き戻し的な円売りも見られ、135.80円台まで値を戻して月足は陽線引けとなった。



四本値	
OPEN	135.176
HIGH	136.263
LOW	129.127
CLOSE	135.842

4日	BOEは金融政策委員会(MPC)を開催し、政策金利を0.25%引き下げて過去最低の0.25%とした上に、資産買入れプログラムの規模を従来の3750億ポンドから4350億ポンドに拡大する包括的刺激策を発表。同時に公表した議事録では、利下げが全会一致、資産買入れプログラムの規模拡大は賛成6反対3で決定した事が明らかとなったほか、過半数が年内0%水準への(追加)利下げを見込んでいる事も示された。利下げこそ予想通りであったが、資産買入れプログラムの規模拡大と追加利下げの示唆が決め手となりポンド売りが活発化。なお、インフレレポートでは「2-3年のインフレ見通しは2.4%で横ばい」「2017年の成長率見通しを2.3%から0.8%へ下方修正」などとした。また、カーニー総裁は会見で包括的刺激策の全ての要素が強化可能だとし、必要ならば政策金利をゼロ付近まで引き下げる事もできると述べた一方、「MPCは政策金利の事実上の下限がプラス圏内であることを極めて明確にしている」としてマイナス金利には反対の姿勢を示した。
16日	英7月消費者物価指数が前年比+0.6%、英7月生産者物価指数が同+0.3%といずれも予想(+0.5%、±0.0%)を上回ると一時ポンド買いが強まる場面もあったが、薄商いの中でドル/円の100円割れを狙った仕掛的な円買いが入るとポンド/円も軟化。浅川財務官による円高牽制発言も効き目なく、ドル/円が99.50円台まで下値を切り下げると129.127円まで連れ安した。ところがその後は、ドル/円が100.50円台まで反発し、ポンド/ドルが1.3050ドル台まで上昇する中で130.80円台まで急速に値を戻した。
18日	英7月小売売上高が前月比+1.4%と予想(+0.1%)を大幅に上回るとポンド買いが活発化。前日の英7月雇用統計で、失業者数が予想(+0.90万人)に反して-0.86万人と減少していた事もあって、EU離脱決定後も英国経済が堅調を維持しているとの見方が広がった
19日	一部通信社が関係者の話として「メイ英首相、EU離脱交渉17年4月以前の開始に前向き」と報じた事を受けて、早期離脱への警戒感が広がりポンド売りが活発化した。
26日	英4-6月期国内総生産(GDP)・改定値は前年比+2.2%と速報値から変わらず相場材料にならなかった。その後、米連邦準備制度理事会(FRB)の正副議長が揃って利上げに前向きな発言を行った事を受けてドルが上昇する中、ポンド/ドルは下落したが、ポンド/円はドル/円上昇の影響が大きく、133.80円台に上昇した。

巻頭の特記事項を必ずお読みください。

GBP/JPY

日経平均

OPEN	16415.31
HIGH	16943.67
LOW	15921.04
CLOSE	16887.40

FTSE100

OPEN	6724.43
HIGH	6955.34
LOW	6615.83
CLOSE	6781.51

英2年債利回

OPEN	0.114%
HIGH	0.220%
LOW	0.067%
CLOSE	0.144%

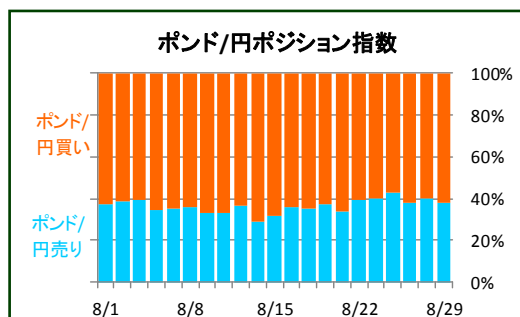
英10年債利

OPEN	0.692%
HIGH	0.839%
LOW	0.501%
CLOSE	0.642%

8月のポジション動向

9月の英国の注目材料

ポンド/円ポジション指数



- ・8月英製造業PMI(1日)
- ・8月英建設業PMI(2日)
- ・8月英サービス業PMI・確報(5日)
- ・7月英鉱工業生産(7日)
- ・7月英貿易収支(9日)
- ・8月英消費者物価指数(13日)
- ・8月英生産者物価指数(13日)
- ・8月英雇用統計(14日)
- ・8月英小売売上高(15日)
- ・BOE政策金利発表(15日)
- ・BOE議事録(15日)
- ・4-6月期英GDP・確報値(30日)

9月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

ポンド/円相場の月足チャートを眺めると、下げ止まり感が広がるとともに反発観測に発展しそうな気配が読み取れる。英国のEU離脱決定による6月の大陰線の後、7月に128.70円台まで続落したが、引値は134円台に持ち直しており7月足には長めの下ヒゲが出現。そうして迎えた8月は129.10円で下げ渋るとまたも長い下ヒゲを生やした上に陽線に転換して引けた。いわゆる「毛抜き底」の形であり、底入れから反転に向かうシグナルと読める。投机筋のポンド売りポジションが過去最大に膨らんでいた反動を考慮に入れば、9月の相場展開は6月以降の下げ幅の半値戻し(144.70円前後)を見据えた動きになる可能性があるろう。

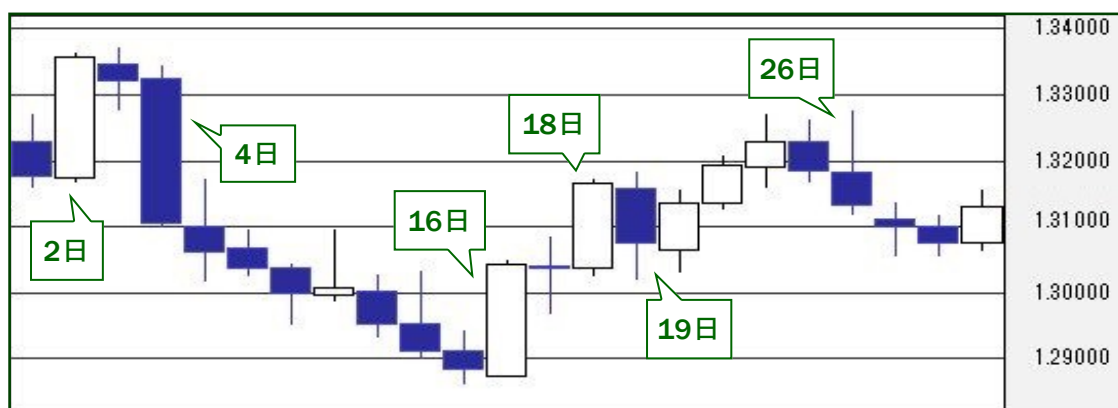
もっとも、より重要なのは英国経済がEU離脱決定後も本当に堅調を維持しているのかどうかであり、仮に軟化が確認されれば再びポンドに下落圧力がかかる事になるだろう。市場におけるBOEの追加緩和観測もこの点に集約される公算が大きい。7月分の鉱工業生産、貿易収支といった経済指標や、7月分は良好だった雇用統計や小売売上高といった経済指標の8月分の結果が大きく崩れない事がポンド反発の第1条件と言えるだろう。(神田)

(予想レンジ: 131.000~145.000円)

ポンド/ドル 8月の推移

GBP/USD

8月のポンド/ドル相場は、1.28657～1.33713ドルのレンジで推移。月間の終値ベースでは約0.7%の下落(ポンド安・ドル高)となった。英中銀(BOE)が、同国の欧州連合(EU)離脱決定による景気後退圧力を緩和するために利下げと量的緩和の拡大を同時に行う「包括的刺激策」を発表するとポンド安が進み、15日には1.28657ドルの安値を付けた。しかし、前月に付けた31年ぶり安値(1.27940ドル)には届かず、7月分(EU離脱決定後)の英経済指標に良好な結果が相次ぐとポンドを買い戻す動きが活発化。ところが月末近くに米9月利上げ期待が再燃しドルが上昇すると1.30ドルに再び押し戻されるなど一進一退の展開となり、方向感が定まらなかった。



四本値

OPEN	1.32300
HIGH	1.33713
LOW	1.28657
CLOSE	1.31331

2日	英7月建設業PMIが45.9となり、欧州連合(EU)からの離脱決定にもかかわらず予想(44.0)ほど景況感が悪化しなかった事からポンドが上昇。さらに米6月コアPCEデフレーターが前年比+1.6%と予想どおりながらも米連邦準備制度理事会(FRB)のインフレ目標(2.0%)に届かなかった事がドル売り材料となった。
4日	英中銀(BOE)は金融政策委員会(MPC)を開催し、政策金利を0.25%引き下げて過去最低の0.25%とした上に、資産買入れプログラムの規模を従来の3750億ポンドから4350億ポンドに拡大する包括的刺激策を発表。同時に公表した議事録では、利下げが全会一致、資産買入れプログラムの規模拡大は賛成6反対3で決定した事が明らかとなったほか、過半数が年内0%水準への(追加)利下げを見込んでいる事も示された。利下げこそ予想通りであったが、資産買入れプログラムの規模拡大と追加利下げの示唆が決め手となりポンド売りが活発化。なお、インフレレポートでは「2-3年のインフレ見通しは2.4%で横ばい」「2017年の成長率見通しを2.3%から0.8%へ下方修正」などとした。また、カーニー総裁は会見で包括的刺激策の全ての要素が強化可能だとし、必要ならば政策金利をゼロ付近まで引き下げる事もできると述べた一方、「MPCは政策金利の事実上の下限がプラス圏内であることを極めて明確にしている」としてマイナス金利には反対の姿勢を示した。
16日	英7月消費者物価指数が前年比+0.6%、英7月生産者物価指数が同+0.3%といずれも予想(+0.5%、±0.0%)を上回った事を受けて、BOEの追加利下げ観測がやや後退するとポンドを買い戻す動きが強まった。また、米7月消費者物価指数が予想を小幅に下回った事でドル売りが強まるとポンド高が加速。その後、ダドリー米NY連銀総裁が「9月利上げはあり得る」などと発言するとドルは反転したが、対ポンドではドル高が進む事はなかった。
18日	英7月小売売上高が前月比+1.4%と予想(+0.1%)を大幅に上回るとポンド買いが活発化。前日の英7月雇用統計で、失業者数が予想(+0.90万人)に反して-0.86万人と減少していた事もあって、EU離脱決定後も英国経済が堅調を維持しているとの見方が広がった。
19日	一部通信社が関係者の話として「メイ英首相、EU離脱交渉17年4月以前の開始に前向き」と報じた事を受けて、早期離脱への警戒感が広がりポンド売りが活発化した。
26日	イエレン米FRB議長が「利上げの根拠がこの数カ月で強まった」などと述べたのに続き、フィッシャー米FRB副議長が「イエレンFRB議長の発言は9月利上げの可能性と整合」などと発言するとドル買い・ポンド売りが活発化。なお、この日発表された英4-6月期国内総生産(GDP)・改定値は前年比+2.2%と速報値から変わらずだった。

GBP/USD

NYダウ平均

OPEN	18434.50
HIGH	18668.44
LOW	18247.79
CLOSE	18400.88

米10年債利回

OPEN	1.4616%
HIGH	1.6330%
LOW	1.4599%
CLOSE	1.5800%

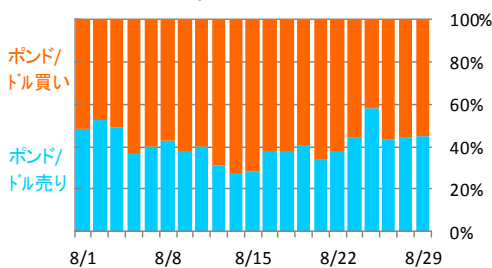
英10年債利回

OPEN	0.692%
HIGH	0.839%
LOW	0.501%
CLOSE	0.642%

8月のポジション動向

9月の英国の注目材料

ポンド/ドルポジション指数



- ・8月英製造業PMI(1日)
- ・8月英建設業PMI(2日)
- ・8月英サービス業PMI・確報(5日)
- ・7月英鉱工業生産(7日)
- ・7月英貿易収支(9日)
- ・8月英消費者物価指数(13日)
- ・8月英生産者物価指数(13日)
- ・8月英雇用統計(14日)
- ・8月英小売売上高(15日)
- ・BOE政策金利発表(15日)
- ・BOE議事録(15日)
- ・4-6月期英GDP・確報値(30日)

9月の見通し

月間指標カレンダー(外部リンク)

ポンド/ドル相場は、6月の英EU離脱(Brexit)決定以降、3カ月連続で陰線引けとなっている。それでも月足ベースでの1.30ドル割れは2カ月連続での「下ヒゲ」であり、この水準での底堅さが窺える。今後、Brexit後の戻り高値(1.34811ドル)を越えて1.35ドル台に乗せられるか、あるいは1.30ドル割れの水準に定着して31年ぶり安値(1.27940ドル)の更新を試すのかについて現段階では判断を下しづらく、9月相場の趨勢から判断したいところだろう。そのカギを握るのは、米国の情勢となりそう。英国ではBrexit後の経済状態のチェックを怠れないが、BOEの追加緩和は11月(インフレレポートや総裁会見がセットの)が有力と見られており、EUとの離脱交渉開始は来年後半にずれ込むとの見方も根強い。為替市場には切迫感がない。一方で、米国は8月雇用統計の結果次第では21日のFOMCで利上げに踏み切る可能性があり、ドル相場の動きに関心が集まっている。2日の米雇用統計が良好なら、ドル高(ポンド安)に振れやすい反面、雇用統計が失望的な結果となればドル安(ポンド高)が進みやすくなる。その後FOMCまでには、米国では米8月ISM非製造業景況指数(6日)、米8月小売売上高(15日)、米8月消費者物価指数(16日)なども発表される。利上げに対する市場の思惑を左右すると見られ、ドルの変動を通してポンド相場に影響する公算が大きい。(神田)

(予想レンジ: 1.27000~1.35000ドル)